早雲だより

２０２３．１０．２６
第１６１号
歴史グループ早雲
代表　井上一夫

第一七七回　歴史ハイキング　報告

宇治市歴史散策と座禅体験

２０２３年９月２４日（日）

はじめに

秋の行楽日和の好天に恵まれた一日となりました。京阪電鉄宇治駅に集合しました。参加者は２６名です。

今回は宇治観光ボランティアガイド３名の方の案内で散策しました。ガイドさんの耳寄り情報を含めた解説により、見学場所の理解が深まりました。例えば、宇治は、平安京遷都以来、奈良との交通の要衝となりました。それが、豊臣秀吉の伏見城築城当時の太閤堤建設で奈良へのルートは伏見回りになり、宇治ルートは一定の役割を終えました。そのほか宇治上神社（宇治神社）と縣神社は平等院の鎮守社の役割があったことなど、関連付けた解説により理解が深まりました。

興聖寺では僧堂にて座禅体験をさせていただきました。興聖寺のお坊様から座禅の作法の説明を受けました。僧堂は修行僧が座禅のほか、寝起き・食事をする、生活の基本となる場所とのことです。座禅体験は誠に貴重な体験となりました。

散策コース

京阪宇治駅～お茶と宇治のまち歴史公園　ちゃづな（太閤堤）～菟道稚郎子墓（うじのわきいらつこのはか）～宇治橋・通園～橋寺放生院～宇治上神社～宇治神社～興聖寺（坐禅体験）～宇治十帖モニュメント～塔の島～鵜飼の鵜舎～十三重石塔～縣神社（解散）

宇治駅を３班に分かれて出発しました。ガイドの方々の解説を交えて報告したいと思いますが、すべてを網羅できていないことをお断りいたします。

宇治駅の外観は大きな円形の開口を一本の直線が横に横断しているデザインですが、茶団子のイメージとのことでした。

（写真）京阪宇治駅

お茶と宇治のまち歴史公園　ちゃづな

歴史公園　ちゃづなは発見された太閤堤と江戸時代の茶畑を再現して歴史公園として整備されました。

太閤堤

太閤堤とは豊臣秀吉が伏見城の築城に伴い、それまで巨椋池に流れ込んでいた宇治川を分離し伏見城下に誘導するために築いた堤防のことで、宇治から向島までの「槇島堤」、宇治から小倉までの「菌場堤」、小倉から向島までの「小倉堤」、伏見市街下流部から淀に至る「淀堤」の。総称として用いられています。それまで巨椋池の流れ込んでいた宇治川が池から切り離され、現在の宇治川がつくられました。小倉堤は、小倉村か

（写真）太閤堤

ら伏見をつなぐ堤防で、大和街道として利用され奈良への近道になりました。

現在の太閤堤は埋め戻され地上から見えるのは忠実に再現されたレプリカです。公園の橋の下で構造を見ることができました。

茶畑

（写真）茶畑

太閤堤は宇治川の砂で埋まってしまいました。その上に茶畑が作られました。お茶の栽培には肥料がたくさん必要になります。肥料（人糞）の供給源の大都市伏見や京都に近いことと水運に恵まれたことで宇治は茶の名産地になりました。

放ち鵜飼い

宇治で鵜飼いが行われていますが、鵜に縄を付けない放ち鵜飼いもこの公園で行われています。一斉に放たれた鵜が逃げないのが不思議ですがその訳は、半数以上が宇治で生まれた鵜だからだそうです。鵜匠に慣れているからだとのことです。鵜の名前は共通で「ウッティー」です。名前を呼ぶと寄って来るのですが、鵜の名前を一つにすると一度にみんなを集める事ができるメリットがあるそうです。

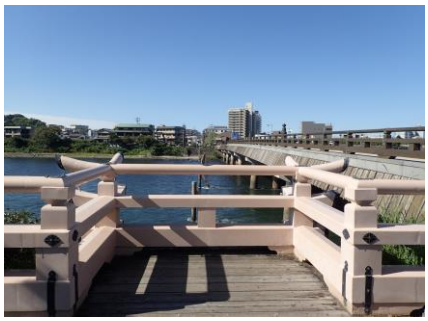
兎道稚郎子の墓

生年不詳、記紀等に伝わる古代日本の皇族、第１６代仁徳天皇の異母弟。

兎道稚郎子の兎道は、山城国の宇治の古代表記とされるように、宇治地域と関係の深い人物である。宮内庁管轄でここが兎道稚郎子の墓と指定されています。

（写真）兎道稚郎子の墓

宇治橋



（写真）宇治橋

古代は川に橋を架けなかったが宇治・瀬田・山崎の3か所は橋を架けました。

宇治橋に張り出した所を三の間と呼びます。秀吉が伏見城で点てるお茶の水を汲んだといわれています。その時のつるべが、通園に残されています。

通園

川は結界で危険な場所、川を渡る前にお茶で清めをしていたことが始まりのようです。

創業は平安時代の永歴元年（１１６０年）にさかのぼります。元祖は源頼政の家臣で、古川右内という武士でした。晩年隠居をして大敬庵通園政久と名乗り、宇治橋東詰めに庵を結びました。

現在の建物は、寛永１２年（１６７２年）に建てられた江戸時代の町家の遺構を残す建物です。

宮本武蔵のお通さんがお茶をめしあがって行かれたようです。京や大和路を行き来した昔の面影が偲ばれる茶屋です。

（写真）通園外観

（写真）通園店内

（写真）橋寺放生院

宇治上神社・宇治神社

創建年代などの起源は明らかでない。宇治上神社の近くに宇治神社があるが、宇治神社とは二社一体の存在でした。手水舎は宇治神社しかありません。

平等院ができると、両社はその鎮守社とされました。

宇治上神社の境内は山城国風土記に見える兎道稚郎子の離宮「桐原日桁宮」の旧跡と伝え、両社旧称の「離宮明神」もそれに因むと言われます。

明治以前、宇治上神社は「上社」・「本宮」、宇治神社は「下社」・「若宮」と呼ばれました。

両社合わせて「宇治離宮明神」・「宇治利休八幡」と称されました。

（写真）宇治上神社

（写真）宇治神社

主祭神は「兎道稚郎子命」応神天皇に寵愛され皇太子に立てられたものの、異母兄、後の仁徳天皇に皇位を譲るべく自殺した。「応神天皇」第15代天皇、兎道稚郎子の父。「仁徳天皇」第16代天皇、兎道稚郎子の異母兄。

２００４年、年輪年代測定調査では、本殿は１０６０年頃のものとされて「現存最古の神社建築」であることが裏付けられました。

本殿は１９５２年国宝に指定されました。

摂社春日神社本殿（国指定重要文化財）

宇治上神社は近くまで寄ることのできる世界遺産でした。境内に春日神社本殿があることから藤原氏との深い関係が分かります。

宇治神社の裏から入りましたが、途中の道沿いのフェンス越しに大正時代のレンガ造りの建物の宇治発電所を見ることができました。

宇治神社でうさぎを3羽見つけると幸せになるとガイドさんからお聞きしました。我々は3羽見つけました。

桐原水（きりはらみず）

（写真）桐原水

桐原水とは宇治七名水の一つで、神社内にある湧き水で、宇治七名水のうち現存する最後の一つである。宇治茶は室町時代に栄え、その宇治茶の象徴として、宇治七名園が作られた。その際、お茶に不可欠な水にも「宇治七名水」が定められ、桐原水はそのうちの一つに数えられ、今なお枯れることなく湧出している。

興聖寺

（写真）興正寺

興聖寺は曹洞宗の寺院。山号は仏徳山（ぶっとくさん）。本尊は釈迦三尊。日本曹洞宗最初の寺院で、道元が興聖宝林寺を建立したことから始まります。

参道は「琴坂」と称し、紅葉の名所として人気を博しています。

興聖寺は、正式には「佛徳山観音導利院興聖宝林禅寺」といいます。

その発祥は１２３３年にさかのぼり、中国から帰朝された道元が伏見深草に日本で初めて開いた禅宗寺院であり、現在、日本に１万４千以上ある曹洞宗において最古の道場です。

１２４３年、興聖寺は延暦寺に弾圧を受け道元が越前国に下向して以降荒廃し、住持４代で廃絶しました。

その後、江戸時代初期の正保２年（１６４５年）に淀城主の永井尚政公が萬安英種禅師を中興開山に請じ、宇治に興聖寺を再興し現在に至っています。

≪坐禅体験≫

坐禅体験は、実際に僧が修行される僧堂で行われました。僧堂の入り口正面に文殊菩薩座像がお祀りされていました。入り口の左端を左足から入りました。興正寺にお坊様から文殊菩薩の前は横切らないこと、そのほかの作法の説明をお聞きして椅子坐禅とたたみに座る座禅に分かれました。

鉦が３回鳴らされ坐禅開始。座禅中は目をつぶらず斜め下をみる。頭は空白にし、思いが出てもそれを追いかけない。

薄暗い僧堂。静けさが心地良い。片足しか組んでいないが、辛くない。

鉦が１回鳴らされて坐禅終了。強張った体を左右に揺らしてほぐす。

お坊様から１８分間であったことを知らされる。

喧騒にまみれた日常とは違う体験ができました。

僧堂を右足から出て興正寺を拝観しました。

（写真）宇治十帖モニュメント

中の島・十三重塔

塔の島と橘島を総称して中の島という。

塔の島に建つ高さ１５ｍの美しい十三重石塔は、日本最大の多重塔で「重要文化財浮島石像十三重塔」である。

縣神社

（写真）縣神社

縣神社は天孫、「木花開那姫命」を祀り、神代以来当地の自主神でした。「あがた」の名は上古（大化の改新から桓武天皇即位まで）の「縣」の守護神であったことを示します。１０５２年、藤原頼道の平等院建立にあたり総鎮守となり、平等院建立以前では藤原道綱の母が宇治に来た時「蜻蛉日記」に「あがたの院」に詣でたことを記しています。以降数度の改築を経て、現社殿は１９３６年造営となります。

あがたの森と称される古社は「あがたさん」と呼ばれ親しまれ、千数百年の歴史を誇ります。

（写真）縣神社

上林記念館

永禄年間から15代続く上林春松家。

その始まりは、初代掃部丞久重が丹波・上林郷から宇治に移住し、茶業に携わったのが始まりです。上林春松家は御物御茶師として代々、茶業に携わってきました。御茶物御茶師の仕事とは幕府御用のお茶をつくるための茶園管理、製造・精製、そしてお預かりした御物茶壷に葉茶を詰める茶詰めという仕事をしていた。また、その他には大名のお抱え茶師として、特に春松家は尾張徳川と阿波蜂須賀家との交流が深く、長屋門の屋根に蜂須賀家の家紋の入った瓦を見ることができます。

江戸時代、御茶師の中で最高位である「御物御茶師」（ごもつおちゃし）として幕府や諸大名の庇護を受けてきた春松家。

しかし、明治以降、将軍家や大名の庇護も一切なくなり、御茶師達の殆どが転廃業を余儀なくされました。

春松家も創業以来の危機を迎えますが、11代春松は当時新開発の「玉露」「煎茶」を扱うことで多くの愛好者を獲得し。茶師から茶商へ転身をとげます。

宇治御茶師唯一の末裔として、450年の歴史を誇る上林春松家。（現、上林春松は15代目）

おわりに

今回は縣神社にて解散しました。上林記念館は解説をしていただいただけで立ち寄りませんでしたが、宇治茶の歴史で重要な場所です。

ボランティアガイド皆様ご案内ありがとうございました。

興聖寺様お世話になりましてありがとうございました。

今回のハイキングは歴史グループ早雲スタッフの一瀬さんと原田さんに準備をしていただきました。

一口感想

K・M

これまで宇治散策に幾度もしていましたが、まだまだ知らない宇治が沢山あることがよくわかりました。太閤堤では、秀吉の巨大な権威を見せつけられ、街角の「通園」が、平安時代の創業とは驚きました。国宝に指定された宇治上神社本殿も平安時代の建物であると知り、直に触れて、良く現代まで美しく存在しているものと思いました。その他のガイドの方の丁寧な説明に、宇治の魅力をたくさん知ることが出来ました。菟道という地名がなぜあるのか、隠れている兎を探すのも楽しかったです。それに興聖寺での座禅体験は、緊張しましたが、心静かな18分間でした。何も考えずたた座るというのは難しいですね。いつもながらわかりやすく、見事にまとめてあるレジュメをしっかり読むのも帰ってからの楽しみです。お世話下さる皆様、いつもありがとうございます。

◇◇◇◇

M・O

京都市伏見区向島に住む私にとって、宇治市は伏見区役所に行くよりも近いのですが、なかなか行く機会がありません。本日は歴史ある宇治の中でも有名な所へ多く訪ねることが出来てうれしかったです。座禅体験もできるというので参加しましたが、太閤堤も間近に見ることができ、良かったです。企画してくださった方に感謝です。

◇◇◇◇

Y・M

宇治に着き宇治川の流れ風光明媚な景色を見て、平安貴族の別荘地となり源氏物語の舞台になったことが納得できた。その後の時代も平等院、宇治川の戦いとし（源平合戦、承久の乱）と歴史の舞台になり続けた。その他にも、宇治茶、宇治川の鵜飼など魅力的なものがある。宇治の風光明媚な土地柄が引き寄せたのかと個人的に思った今回の史跡散策であった。

◇◇◇◇

H・M

素晴らしいハイキング日和りとなりそうですが、30度を超す暑さには、閉口しました。

一度は訪れてみたかった、太閤堤。伏見城築城に伴い、巨椋池に流れ込んでいた宇治川を池から切り離して、現在の宇治川がつくられた。太閤秀吉の偉大さをつくづく感じた。

また、聞いてみないと分からないもので、京阪宇治駅の南側の壁のモニュメントは、茶団子の串刺しと茶籠を表しているらしい。

そして、歴史公園ミュージアム「茶づな」の意味は、公募により、高校生のアイデアから「宇治の茶が一本の綱のようにたくさんの人と歴史をつなぐ」という願いが込められているそうです。

興聖寺での座禅体験では、前置きの説明が長いわりには、以前体験した酬恩庵での警策による肩叩きもなく、期待外れで残念でした。

◇◇◇◇

A・I

歴史ハイキング日和の好天に恵まれ、さわやかな時間を過ごさせて頂きました。興聖寺さんは以前から大好きなお寺の一つでした。準備、段取りしていただいたスタッフの皆さん、ありがとうございました。

【編集後記】

ボランティアガイドの皆様、先導及び各所の解説ありがとうございました。

興聖寺様での座禅体験は、18分間ながら座禅ができて誠に貴重な体験でした。ありがとうございました。